

1977ねん 5月号

No15

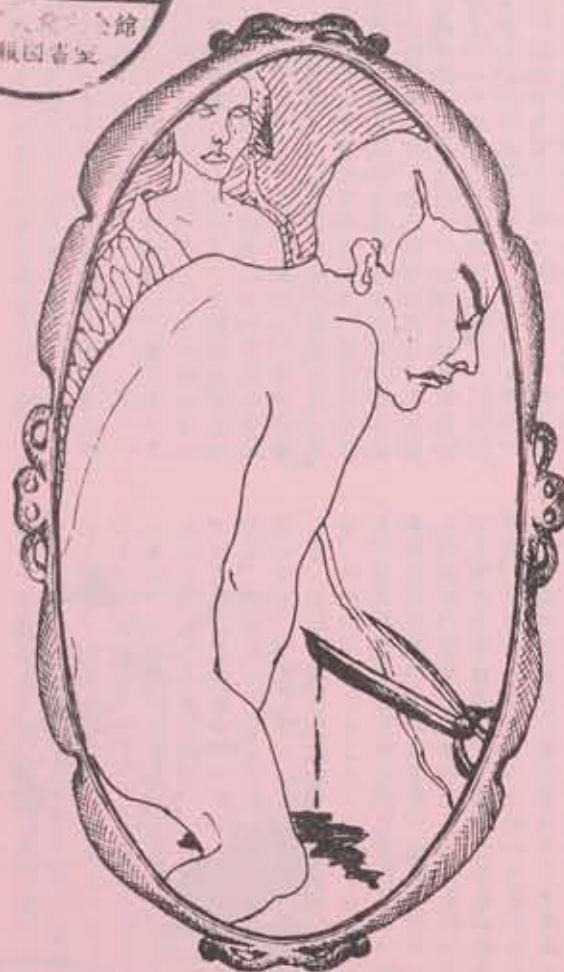
あふあて

発行人 / 発行所 / あふあて出版部

逐次刊行物

昭 53.7.16

情報図書室



女 タ チ ヨ /

資本主義体制ニモマケズ
高度成長経済ニモマケズ
公害ニモ人口問題ニモ心ヲ配ル
広範ナ感性ヲモチ
オゴリハナク
決シテ怒リヲ忘レズ
イツモ問題意識ヲカカエテイル
一日ニ玄米三合ト
味噌ト少シノ無農薬野菜ト
魚ト鶏卵ヲタベ
アラユルコトヲ
思イ入レヲ入レスギルコトナシニ
深くカカワリソシテ納得シ
街ノ片隅ノアパートノ
ゴク普通ノニDKニイテ
東ニ国家権力ノ実カ行使アレバ
行ッテ連帯ノスクラムヲ組ミ
西ニ母子心中アレバ
行ッテソノ死体ニ花ヲソエ
南ニ自閉症ノ少年アレバ
行ッテココロヲ開カセヨウト努メ
北ニ老イタ母ガヒトリ寝テイレバ
トキドキ訪ネテメンドウヲミ
悲シイトキニハ涙ヲ流シ
嬉シイトキニハホドホドニ笑イ
皆ニナカナカヤルジャナイト云ワレ
イバリチラシモセズ
頭ヲ下ゲスギルコトモナク
ソウイウ男ニ
ワタシタチハ惚レコミタイ

(12・MAY記)

詩 ・ 白石
イラスト・ 小林

あんふあんての目

変わらない男
変わらない女・その2



今まで一人だけで胸にしまっておいた「こんなはずではない」「これでいいのだらうか」「何かおかしい」という思いが、何かをきつかけに噴出する。「あんふあんて」などで、それが「やっぱり自分だけではなかった」という気持ちも加わって、憤りの速度は早まっていくな。そして女たちの誰かに、単に胸の内を吐露するだけでも、かなりの胸のつかえはスツとするもんだ。胸につかえさせられていたとか、胸の奥深くしまいかさまセラレテイタとか意識するしないに関わらず、ともかくスツキリするという対症療法的なことも不可欠だし重要だ。育児ノイローゼ、ヒステリー気味、イライラ、自閉症的、空虚感、無気力、等々の疎外の現象を多少の差はあれ、確かに溶解させるのだから。しかし、サセラレテイタと意識し、何故そうなってしまうていたのかを考え、さらに、そこに甘じていた自分

を冷静にみつめるといふことなしに、胸スツキリだけで終えてしまっていたら、きつと又べつの胸のつかえをかかえこむことになるにちがいないのだ。女たちによる胸スツキリ作業が、妻のヒステリー気味、イライラを消し、ニコニコと子どもとたわむれ、又、イソイソと料理などをつくってくれるなら、夫は喜んで「あんふあんて」だろうが何だろが、賛成し、多少の協力もし、理解ある顔もできるのはあたりまえ。その胸のつかえをつくっている一人でもある夫自身は、真面目から受け止める気があるかないかに関わらず、自らの手は汚さずに責任を追及されることもなく、快適な椅子に座っていられるのだから、あたりまえ。しかし、いっただん女たちが、サセラレテイタののではないかなどと気づき始めると、椅子はガタビシとゆれ始め、つい「友だちやまわりが悪いのでは」などの邪推も出ようというもの。女たちは、サセラレテイタと意識し始め、考え始めると、男たちへの不平不満、要求などを一番身近な男、夫へいきいきぶつける。この時、単に身近だというだけではなく、甘え、期待、その他さまざまな思い入れが複雑にかみ合って、一人の女から一人の男へと向けられ、例えば感情的なやりとりからケンカごしの会話になり、妻が一方的に弾丸のように不満を並べていくけど無反応の夫となつて、およそ理想的な男と女、夫と妻という関係、正常で冷静なコミュニケーションは程遠い。

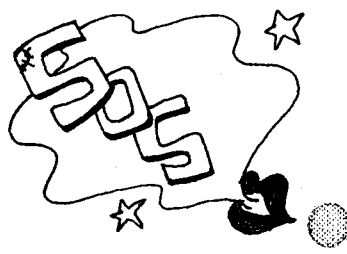
多少の不満をぶつけ、少しは対症療法としてもけんかするのはけつこうなことだが、複雑な思い入れと、男たち、社会へ向けるべきことを少しづつ区別していかないと、風通しはよくならない。又、互いにわかり合うには、よく互いを見ることが必要だ。一方的なわがままではなく、自分がわかって欲しいと思っている時は、同時に相手もそうにちがいないという思いやり、やさしさが必要だ。この際じっくりと、男を、男の生活を、働きぶりを、考えを、気持ちを、みてみよう。そうすると、きつと、自分の胸のつかえと同じ質のもの「疎外」があることに気づくはずだ。しかし、そこで心情的に「男も大変なのよネ」とひつこんでしまふことはない。大変なのは互いであつて、そこをわかり合つて終わりにするのは、まだ対症療法の域を出ないことになる。いつまでもけんかという、互いに不満、イライラの石のせ合ひではなく、互いに石をどけ合つていく形は少しは進歩といえるかもしれないが、その石の材質をいっしょに研究し、溶解させることを考えていかなければ、今度は子どもたちの頭上に石はのつかつてしまふのだ。その石の材質研究を、二度と子どもたちの上に石をのせたくないと思う人たちがみなで、やりたいものだと思う。

(古知)



体験レポート

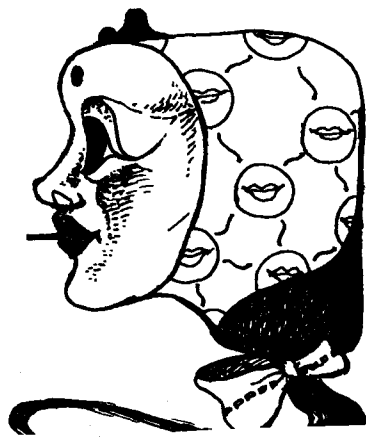
やらざるを得ない時、
男は……



3月30日退院、1ヶ月ぶりのわが家さぞかしちかかっている事と思つていたら、きれいに、私がいた頃と全く変わらなく片づいていた。夫が笑いながら「休みは一日掃除と洗たくでおわつてしまったよ」と、つぶやいた。私が入院している間、子供達は夫の実家と私の実家で交代で世話になっていた。大体一週間交代の割で、いつたりきたりしていたそのうだ。保育園は休ませたくなかつたので、実家の親達に、連れていってもらった。幸い夫と私の両方の実家が、近所だったので、このような事も、出来たが、地方の場合には、そういう訳にはいかないだろう。私としては、子供達の年令も高いので(6才と4才と夫に、面倒を見てもらいたかつたが、夫の仕事の就業時間が、不規則なのと朝が、早い為、保育園の時間にあわず、やむなく頼んだ。退院してからの生活は、私が体の自由が、きかず、トイレにいくのが、せいじつぱいという感じが、家事全般は、夫にしてみらうより仕方がない。夫は休日に、掃除ぐらひは、今迄していたが、炊事となると、インスタン

トラーメンぐらひしか作つた事がなく、どうなる事やらと思つていたが、私という司令部が、いるので指図どおり動いてもらった。最初のうちは、面白そうに炊事に取り組んでいたが、後片づけ、入浴、洗たくと続くと、疲れた／＼と逆発する様になつたが、私が動けないので、それ以上は何も言わずやつていた。買物などは、あらかじめメモして団地のあんふあんてのメンバーに頼んだ。保育園のおむかえも、私が家に帰ってきてからは、仲間達が、交代でひき受けてくれたので、とても助かつた。子供の保育園が団地内になく、バスで10分さらに、降りた所から保育園まで、8分位、かかるので大変だつたと思う。私の仕事の方は、一応事情を話して、休んでいたが、入院している間も、退院してからも、給料日になると、会社の人が給料を、家まで、届けてくれ「心配しないで、ゆつくり休んで直しなさいね」といつてくれるので、恐縮してしまつた。私自身今の保険の仕事は、いずれやめるつもりでいるのに、こんなに親切にされると、悩んでしまう。骨折というのは思つたよりも大変で全治するのに、6ヶ月位かかるそう。松葉杖がとれるのが、月いっぱいそれまでは、自宅でかんづめ。外のさわやかな空気が、うらめしい。子供達は母親のいない生活を、1ヶ月余り送つたのが退院してからは、とてもよく家の手伝いをしてくれる。私が立つとすぐ、松葉杖をとってくれる。トイレに行けば、サツとドアをあけてくれる。何もできない私でも、家にいるだけで、嬉しいらしく何かにつけて、いたわつてくれる。夫の帰宅が、遅い時は、長男が、簡単な料理をしてくれる。小さい時から、

私と一緒に炊事を、手伝わせているのでおもわぬ時に、役だつた。これからもどんどん、家事を仕込んで、母親が、病気をしても困らないように、育てていきたいものだ。夫も私が退院した当初は、帰宅も早かつたが、日がたつにつれ、もとの生活情態に戻つた。私の母が、たまに家にきてくれ、家事全般を、してくるので、その辺の所で、息ぬきをしていくようだ。私もだんだん片足で立つのが慣れ、少し位の家事はできるようなつたが、それでも1m先の物を、取るのに、ひと苦労する。夫はつい私が、足の悪いのを忘れ「それ取つてくれない」などいうが「ああ、いいよ／＼」と苦笑しながら料理をやっている。今迄料理の味が、辛い甘いのと、文句をつけていた夫も、作る側になつてさぞや思いの味付けが、できるだろう。こんどは、私が文句をいう側で、とてもいい気分。子供達が働きながら、家事をソツなくやるという、大変さが身を持って、解つたようだ。これをよい機会に、わが亭主殿を教育しなおさなくてはと思う今日このごろである。



交流会から

男たちへ



4月交流会が武蔵野公会堂で、「男と子育て」「夫と妻の関係」のテーマで開かれた。出席者は大人5名、子ども5名と淋しい人数だったが、その分子どもたちが大いに騒いでくれた。交流会の報告というよりも、話されたことから考えた参加者の一人の意見として書いた方がよいのではということになった。

「男と子育て」を話す時、そこに「妻と夫の関係」が深く介在し、「妻と夫の関係」を話す時、子どもという親族の存在が大きく関わってくる。このやっかいな親族という三角関係の中で、女にとつてとりわけ重要なウエイトをしめ、このことを抜きには考えられないのが「女の問題」というヤツである。幼い頃から女の問題を社会的レベルで意識してい

る人は稀であろう。ことある毎に「オカシイナ」とは感じていても、「女は可愛いのが一番」「結婚こそが女の幸福」などと言われ、又少しでも理論的に話そうとすると「理屈をこねる女なんて」と一蹴され、結局「オカシイナ」というモヤモヤは胸の奥深く押込んで、気に入られる様に努力してしまう。しかしある日、胸のモヤモヤがどうしようもなく頭をもたげるときがあるのだ。人によつては、就職しお茶くみとコピーに明け暮れている時であり、結婚し共働きをしているのに一手に家事を引き受けている時であり、又、女の問題の討論会などで触発された時であるかもしれない。

私の場合は子どもが生まれ、外から見るとまさに幸福の絶頂と思われているその時だった。思うによくもここまで洗脳してくれただのである。話し合った訳でもないのに「料理は愛情のしるし」なんて女性週刊誌を地で行ったように食事を作り、そうじ、せんたく、いわゆる家事と呼ばれる生活技術全般は私の担当と思いついた。相手もこのことに關しては当然と思つていたようだ。男は母親などに身の回りの世話をしてもらうことに慣れている、というよりも、もつと自然な感覚として生活体系の中に組み入れているとさえ思う。それでも二人だけの時はアマチュア芝居もやり、縄のれんもくぐり、結構自由な気持でいたし、「男の友情はあつても女のはあり得ない」とか、「女は本来敵対するものだ」とか、実にオメデタイほど男社会の論理にのせられていた。しかし、妊娠・出産という女の生む性が現実のものとなつた時、私の行動範囲は極端にせめられた。出産に伴い、芝居はもちろ

ん仕事もやめ専業主婦となった。これまでの友人とも、時間的なすれちがいや子連れの大変さ、気ぜわしさもあつて、自然に遠のいていった。子どもを生んで一ヶ月は病院以外一歩も外に出られず、買物でさえ、一人で家に置いて不慮の事故の際はどうするのかとおどされて、週末にまとめてしたくらくらした。「オレは子どもが生まれたからと言つて早く帰る様なダラシないことはないゾ。そんな奴は仕事もロクにできないんだ。」と言われ、私もその時は「そうね」と不覚にもうなずいてしまつてた。まだ出産と育児の区別がついていなかった時だ。当初、育児は女がやるべきものと思つていた私。近所に友人も話し相手すらなく、おしめ洗いに追われ、夕方カベに向かつて声を出して自分を確かめるといふような虚しい日々が続いた。楽しいはずの育児が何故こんなみじめなものになつてしまつたのだらうと考え始めたのは当然だ。これを皆が通つてきた一時の辛棒と考えるのは一つの居直りであろう。しかし、私は今、この時を生きたいのだ。

社会通念であるところの男女の役割分担意識を取り除けば、モヤモヤもすっきりするのではないか。これらのことをはつきり意識し考え始めた女を、男は突然の変化としてびっくりし、自分の立場を崩すまいと、友人が悪いのではないかなどと邪推したりもする。しかし女にしてみれば、人間として抑圧されてきた部分が出て来ただけなのだ。解放されていると感じている男たちよ、もう一度自分の足場を見直してみて下さい。あなたも「役割分担」のとらわれの身なのですよ！

共同保育考

「共同」を問う



山岡

4月に創刊された雑誌「クロワッサン」によれば、1時間千円前後の託児施設が結構盛んでいるということだ。またベビシッターなども核家族の増加や風俗の変化（母親も時々育児から離れてテニス、コンサートなどにetc）によつて、なくてはならぬものになつていくという。たしかに「あんふあんて」もそんな社会状況の変化の中から生まれてきたのかもしれない。

しかし単なる預けあい（ヘルパー）、遊ばせあい（共同保育）なのだろうか。あんふあんての中で出合ったおんなとおんな。いったいそこで私たちは何を共有しているのであろうか。もし「便利」で割り切るのならお金で自由時間を買えるベビシッターや託児施設の方が合理的でもある。「便利さ」を目的に「あんふあんて」のおんなたちと出会いたいと望んだ時、それは単に「便利な何か」になつてしまふような気がしてならない。

共同保育に参加している各会員が子どもの服装やしつけの相違という問題が生じた時、単に近所の人にコミュニケーションしていく

時と同じ感じで、つまりできるだけあたりさわりのない感覚で接していく時、私は共同保育の共同は疑わしいし、もしかするとないのではないかと、と思うのである。

単なる預けあいや遊ばせあいでは、その個人の発言に対する応答の仕方は実にあたりさわりが無い。というのは、たとえば何故子どもに対して厚着させるのか、とか何故きちんとした姿勢をとるよういふのか、を追求すればする程、人間関係そのものが歪んでゆくし、お互いに気まづくなつてしまふやういふ。だから彼女の、彼の、子育ての方針には逆らわない。「厚着させるな」というところを「厚着じゃあないのかしら」ぐらいで終つてしまつていく。そこには、ストリートに個人と個人の関係がぶつかりあうコワサと限界があるように思う。

そうではなく、あんふあんてで共同保育をする場合は、もう一歩つこんでゆける。何か「こそ共同なのではないか」と思う。もう一歩つこめると「何か」とは「あんふあんて」に集まつて出合いを求めた原点みたいなものであつて「何故この人は子どもに対して厚着させるのか」から、「今後3番目の子どもをお産するので、その間子どもの世話や家事など手伝って欲しい」というような、いわゆるあたりさわりのない関係から一歩、二歩と歩みよつていく人間関係の作り合いなのではないかと思うのだ。

それは共同保育に關していえば、「甘いものが好きですよ」で終わつていた会話からもつと突つこんでいって、何故甘いものが好きなのかという問いかけが始まり、「甘いおや

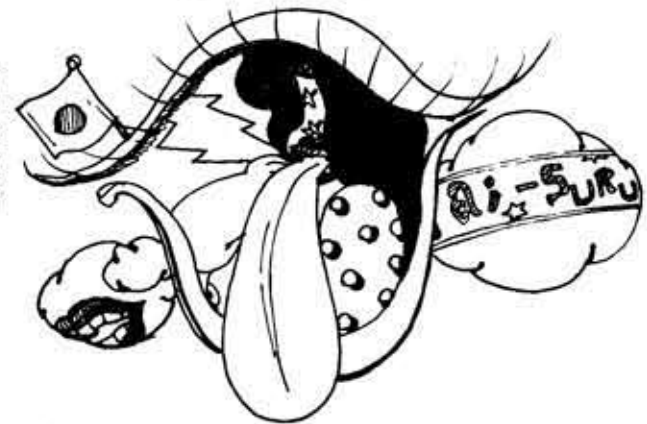
つ」に疑問すらいだかなかつた人が、いままで気にもしていなかつた事柄について考え始めるということにもなる。そして「甘いものはダメですよ」に変わっていく。何か「である」。

また3番目の子どもを生むべきか中絶すべきかというある会員のまよいが彼女ひとりのもので終わるのではなく、共同保育をしている各メンバー相互の問題であり、もし生むなら2人の子どもの世話とか、出産に反対な夫の説得が加わってくるのかもしれない。いわば「生き方」「生きざま」の共有ということになるのではないだろうか。

生きざまの共有というのをなくして、たとえばあんふあんての共同保育は日常生活から分断されていて不便であるとか、お互いに関係を画してしまつたしつけの相違といった問題が会員相互の出合いを貧弱にしているように思えてならない。

日常的な交際の範囲では一歩も二歩も個人の私生活にふみこんでゆく「つきあい方」はかなり危険だし、面倒だし、うっかりすると仲たがいの原因にもなりかねないことは前にもべた。しかし、あんふあんてというある「共同性」を中心にそこへ関係性をぶつけてゆく時、会員と会員のあいだには、ストリートな個人と個人のぶつかりあいではなく、そこには「あんふあんて」というクッションがあるのだから、ふだんの交際範囲で見られるよりももつと突つこんだつきあい方があつてもいいと思う。そしてこのことこそ、生きざまの共有であり、ひいては共同保育の「共同」であるように思う。

いいたいほうだい



埼玉県三郷市

私三十一、夫二十九、息子三才、一見平和風自分の分身という感覚が欲しくて長男を産み出したつもり。なのに何故か人生観が狂い始めた。自律神経の弱い私は、苛酷な程の育児修業、常に現実を逃避して過去の姿を美化し続けた。男の生活そのものは変わらず家庭を維持し、家族を養うことが出来る。なのに女にとって子供の存在は重過ぎる。誇り高き？秘書業を追われ、子供にとって理想的と言われる世間体のために一才半迄の事実上母子家庭を強いられる。毎日の時の長さを唯漠然と、カレンダーに×印が増えることのみ楽しみに年一度の帰郷を心待ちにする。実家の母ならば喜んで面倒見てくれるから、その間に

コンサートへ行こう。宮城まりこのねむの木の歌も見なくては、と……
こんな失格ママが新聞の三面記事に載らずに済んだのは「子連れママも銀座を闊歩しよう」の記事ノそれから一年半、再び生きかえる思いで、自由を求め続けている。想像以上に多くの、かつて孤独だった母親達との連帯。今こそ世のしくみを愛さなくては……団地の中でも素適なミセスハントに心躍らせ、素晴らしい仲間を得たのである。クリスマスともなると、三家族合同パーティーに夫も子供も楽しい時を過ごし、又時にはあんふあんて会合のために夜の託児までお願いする始末。今や紆余曲折を経て念願の児童英語教室を開いた私にも、唯一つ悩みが生じた。宝息子の保育園での遊びが自閉的という保育士の観察で、東大病院まで行かねばならなかった事実。
そんなある日、夫が借りて来た「幼児開発論」お馴染みソニーの井深雄、元東大総長の茅節バイオリン才能教育にける鈴木節、揃って早期教育に心を砕く御人が、○才児について語る。何はともあれ母親の責任、三才までに能力を生かすか否かで人格が決まる、と宣う。確かに我身を振り返れば子供に密着していた。かつた。レコードや本読みの形で接していた。けれど、問題は何故母親が明るく楽しく子供に接することが出来なかったか？近所に語り合える様な友もなく、不安と焦燥に苛まれていたかにあると思う。母親自身に希望をもたらしものがなくては、一億総白痴（？）にもなりかねない。あんふあんてを世の隅々に浸透させて、一人も孤独な母を失くしたい、と思うこの頃である。

地方だより

もはや蟬の声の土佐から
隣のソメオおばさんがなくなりました。駐在さんとバイクでかけつけた医者は、約10時間前を死亡推定時刻としました。すると大雨の真夜中にみえたことになりました。
屋敷の隅に猫を捜しに訪れた近所の人が彼女の死を発見しました。わたしもかけつけました。ひっそりした土間から見えたのは、あのうことか畳の上に仰向けになったまこときれたソメオおばさんでした。「駐在さんが来るまでつかれん」と発見した人が言いました。わたしは涙でボロボロでした。
ソメオおばさんは、もうすぐ80歳になるところでした。結婚はしませんでした。若い頃は大阪や九州で自由奔放に暮らしたこともあったようでした。わすかの老人年金でひとり暮らしでした。わたしがここに住み始めた約一年のつきあいでしたがいつも身ぎれいだった姿をみかけましたし、笑顔でおしゃべりしました。情にもろく、なにげない一言に涙する人でした。死の前日は道端にしゃがみ込んで草取りをしていました。
「ひとり暮らしの死」を時折、ジャーナリストブックに見かけますが、ひとの暮らしは様々ではありません。ひとりととか、ペアとか、集団とか、さまざまです。ひとにあわせるのがいいのか、じぶんだけにあわせるのがいいのか合理的にはわかりきれないところがあります。
彼女の生き様は「むごい」というより見事だったと思えます。

東京都北区

先月（4月）号の「いいたいほうだい」の欄の、さんの記事を興味深く読んだが、彼女とは、基本となる考え方は同じでも、現在の私の働き方や、それによる職場での周囲の反応も違っている点について考えさせられた。5年間、自宅で子育てをしながら、のんびりとタイプの下請をしていた状況から抜け出て、ある印刷会社にフルタイムの勤務について2ヶ月が過ぎた。今迄、使っていた機械の操作や、仕事の内容も全く違う点もあって、お昼の休憩時間を惜しむ様なことこそしないが、残業が必要である時はもちろん、余り必要としない時でも、自分なりに納得のできるノルマをこなせる迄、残業をした。それは決して、子持ち女であつてもハンディを持たないといふた気負ったおもしろいからでも、少しでも沢山のお金を得たいというおもしろいからでもなく、先に述べた様な理由で是非とも人よりも多く働く必要があつたし、今迄の一人よがりな未熟な技術を再認識したからでもあつた。負けず嫌いな性格の為、一字でも多く打つことで機械の操作に慣れたかつたし、先輩の持つ自分より高度な技術を一日も早く習得してしまいたかつたからである。しかし、ある日、私と同輩の子持ちの同僚から「あまり頑張らないでよ。こつちがやりにくくて、仕様がわからないわ。ここは子持ちの女でものんびりとやれるから動いてくれるの」といわれ、上司からは「子持ちの主婦でありながら、平然と残業をやつたりして、一体、家庭はどうなっているの？」と憶測され、家事・育児は夫が協力してくれるからと弁明すれば、たちまち、

悪妻愚母のひそかな噂さえのぼり始めた。そんな噂など、少しも気にならないが、私自身、決して同じ状況の女達の足をひっぱろうというおもしろいはなく、あくまでも自分の都合からだけでやってきたのだが、結果的には、やはり、そうやってしまったことに、今更ながら、反省せざるを得ない。しかし、さんの様に、時間一杯、信念を持って働いている人は別だろが、女達の中には「私は子持ちの主婦だから」といつた甘えの上にどつかとあぐらをすえて、出来るだけ会社では消耗しない様にしようと考えている子持ち女も多いことを否定することはできないのではなからうか。私自身の性格にもよるだろうが、一歩社会に出て、仕事に取り組んでみると、下請の時とは違う厳しい面がぶつかつた時、主婦であるのが、母親であるのが、自分の納得のできる迄、仕事をしたいという意欲にかられ、頑張つて一つの仕事を成し遂げた時の喜びと充実感とは、子育てとはまた違う「生きがい」にすら結びつく。決して「誠私奉公のがんばり」ではなく、私にとってこうすることが、自然な自分のペースなのである。けれど、だからといって、5時になつたらさつさと帰つてしまつた同じ子持ち女の同僚をみても、決して「ダメ」とは思わないし、優越感を持つことはない。彼女には彼女の信念、そして私には私の信念があつたのだから。子持ち女とはこういうもの、未婚の女とはこういうもの、といった既成概念を取り除き、あくまでも、個人／＼の考え方によつて、さまざま働き方があるのだという風に、みていきたいと思う。

ハガキ一枚の活動

こういう友人がいます。ドカッとハガキがテレビの横に横たわっており、カベにはテレビ局の住所がリストアップされています。これはオカシイナと思つたら、すぐ書いて出すとのこと。「ガマンしないことにしたの。」の友人の一言は、その行動性と相まって、実に説得力のあるものになつています。このアイデアはとて素晴らしいし、私たち子持ち主婦などは特に活用したいところ。テレビだけでなく、新聞、雑誌、（もちろん、女性週刊誌へ）もそのバカバカしさを無視することなく、ラジオ、子どものオモチャ、お菓子、その他モロモロの生活実用品の品質や価格宣伝、コマシナル、売り方……。又、大事なものは、その実行と実行のための準備、例えばハガキを買っておくとか、少くとも社名だけは覚えておくとか。
サテ、そのハガキの中の一枚で、是非あんふあんて、情報誌への感想を送ることも忘れずに。今回の詩、イラストなどはどうでしたか。誤植などみつけたら、おしえて下さいね。
いつも情報誌を読むだけと思つていらつしやる方、会合などの活動に参加できないと思つていらつしやる方、原稿をかくまではチェック……という方、ハガキ一枚の活動はいかがですか。
(古知)

グループ報告

杉並区公報を利用して



私達あんふあんと井の頭線グループは、去年十月以来、共同保育を行って来ました。今年に入って、会員の減少で思う様に共同保育が出来なくなり、情報誌などで会員の募集をしました。結果はサッパリで何とか共同保育を続けてゆく為にも、住居区の公報(毎月五日・二〇日に発行される区民の為に新聞)に募集広告を出して見ました。内容は次の通りです。『グループ保育しませんか』私達あんふあんとグループでは毎週一回グループ保育(共同保育)をしています。その他お菓子講習会、ピクニックやお茶会など楽しい催しも計画しています。以上この広告の申し込み方法は簡単に、ハガキに掲載希望の内容(一五〇字以内)住所、氏名、年令、職業、性別、電話番号を書き掲載

希望日の前月の十五日までに広報課へ送ります。課としては営利を目的とした活動以外のものであればすぐ掲載してくれる様です。(掲載料無料)三月十三日にハガキを出した所、三月二〇日発行の第六七五号にのりました。思ったより早くのりました。三月二十一日頃から問合せの電話が鳴り始めました。四月下旬までに大体六十数名の方から電話があり、その問合せ電話の内容をまとめると次の様になります。『近所づきあいがなく、親子共に友達欲しい。』『子供の性格が引っこみじあんなので大勢の子供達と接し遊ばせたい。』『三、以前から「あんふあんと」の様なグループを探していた。』『子供が自閉症で幼稚園、保育園に入園出来ない為グループの中で普通の子供と遊ばせてやりたい。』『五、共同保育に興味があり参加したい。』『六、近所づきあいにもの足りなさを感ずる。』『七、母親自身も共同保育が出来ないから。』『八、子供を幼稚園に入れないのでグループ保育させたい。』『九、母親が自分の時間を持ちたい為に子供を預けたい。』この他に全々異なった内容の電話が二、三有りました。一つは明治生れのお婆さんから、子供好きなので余暇に皆さんのお手伝いをしたい。という電話でした。しかし一週間程してこちらからお願いの電話をした所あっさりフラレてしまいました。もう一つは大学の講師をされている人からで、これはお手伝いのパートを探している。子づれでも良いから家の雑用

をして欲しい。これらの六十数名の問合せ電話を区域別に分けてみると。一、井の頭線(永福町、大宮、松の木、高井戸、久我山方面)約二十五名。二、中央線(西荻、荻窪、阿佐谷、高円寺方面)約二〇名。三、西武池袋線(井草、下井草)約五名。四、天沼、成田東、方南町、堀の内、和田方面、約十一名になります。予想以上の人から電話があり、先づ説明会を開く事にしました。私達の会だけではサバキきれないので阿佐谷グループのさん、西荻グループのさん、協力して預いて、三日間説明会を行いました。29、井の頭線説明会、出席者十名、4/5、西荻グループ説明会、出席者六名、4/7、阿佐谷産業会館で、阿佐谷グループ説明会、出席者五名(この日は雨の為半分しか集まらず)この結果現在各々のグループに入って活動を始めた人は、井の頭線十二名、西荻グループ四名、阿佐谷グループ四名、計二〇名です。問合せ電話六十数名からするとグループに入って活動を始めた人が少ない様ですが、まだまだ共同保育に対して消極的な人が多い様です。中には、共同保育には賛成だが、あんふあんとグループに入会するのはどうもと言う人もいました。(リブのグループと解釈している様です。)現在私達のグループは新会員と共に共同保育を始めています。五月には一泊の旅行も計画しています。最後に、この公報を利用して感じた事は、あんふあんとがまだまだ余り知られていないと言う事、(共同保育という事自体も)より多くの育児中のお母さんが会に参加することを希望してベンを置きます。

図書コーナー

今回は、東京都立中央図書館に勤めていらっしゃる会員の、さんの御協力を得て、男と子育て、家庭・家族関係の本をリストアップしました。是非、活用して下さい。

- 「父親入門」 阿部進著・日本ライフブックス
- 「頼りになる父・ならぬ父」 坂本亮著・明治図書
- 「おやじ、たまには聞けよオレの話」 矢野寿男著・日新報道
- 「パパの出る幕」 品川不二郎・第3文明社
- 「パパの幼児教育」 山陽中央テレビ放送編・新人物往来社
- 「父親は、いかにできるか」 永山貞夫著・日本教文社
- 「オヤジからの伝承」 サンケイ新聞社編・光風社書店
- 「オヤジ群像」 読売新聞社婦人部編・あすなろ書房
- 「父親の社会学」 ベンソン・L著・協同出版
- 「ぼくらを繋ぐなノかつて若かつた父へ」 ルーカス・J・アンソニー著・草思社
- 「おやじ学入門」 斎藤幸一郎著・協同出版
- 「講座家族・2 家族の構造と機能」

- 青山道夫他著・弘文堂
- 「家族関係を学ぶ人のために」 中川淳著・世界思想社
- 「家族とは何か」 青井和夫著・講談社
- 「現代日本の家族問題」 山手茂著・亜紀書房
- 「オヤジ・父なき社会の家族」 NHK「70年代われらの世界」プロジェクト編・ダイヤモンド社
- 「誰のための家庭か」 藤井治枝著・明治図書
- 「図説・家族学入門」 湯沢雅彦著・NHK出版
- 「現代日本の家族」 家族問題研究会編・培風館
- 「家と現代家族」 森岡清美、山根常男著・培風館
- 「家族変動の社会学」 青井和夫、増田光吉著・培風館
- 「家族関係学」 木暮英夫著・酒井書店
- 「家族関係」 久保木康男、大久保治男著・芦書房
- 「核家族と子どもの社会化上・下」 パーソンズ、ベールズ他著・黎明書房
- 「家庭はどう変わる」 一番瀬康子著・ドメス出版
- 「父と子の対話」 古木俊雄・インタナショナル出版
- 「東京大学公開講座17 親と子」 加藤一郎著・東大出版会



- 「親と子・この予期せぬ人間関係」 伊藤友宣・ばいば出版
- 「現代の親を告発する」 加藤三著・PHP研究所
- 「親子を考える」 なだいなだ著・キリンビル
- 「誰のために子どもを生むか」 青木やよい他著・風潮社
- 「主婦とは何か・家事労働と婦人の意識」 生活科学調査会編・ドメス出版
- 「男と女」 朝日新聞学芸部編・朝日新聞社
- 「東京大学公開講座18・男と女」 林健太郎著・東大出版会
- 「現代の婦人論」 田沼肇著・大月書店
- 「男世界と女の神話」 ジェイン・E著・三一書房
- 「職場と妻の谷間で」 加藤尚文著・技報堂
- 「男性社会・人間進化と男の集団」 タイガー・L著・創元社

情報コーナー

△ゆずってください▽
ベビーハイカーを安く譲って下さい。2才半の子を山登りへ連れて行きたいと思っています。

6月に出産の友だちがいます。困窮しているのは産準備ができていないです。入院用赤ちゃん用、マタニティー用、なんでもけっこうです。ゆずってください。

大人用の勉強机、又はライティングデスクを有料で譲り下さい。価格は相談の上で決めたいと思います。

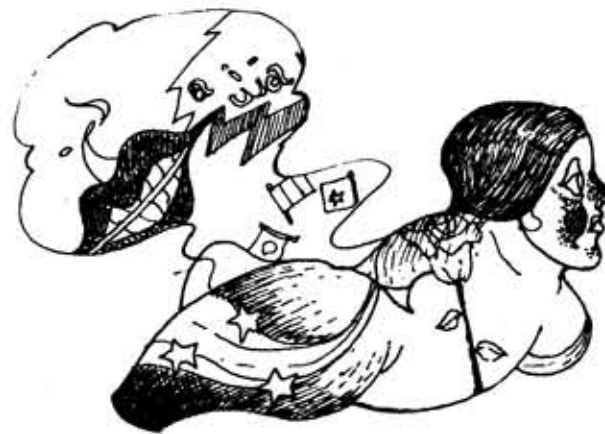
△女二人で売り始めました▽

自転車用子供補助椅子です。上質の柳でしっかりと編んであります。背もたれの高さが29センチあり、ゆったりした大きさです。子供が眠っても落ちる心配がなく、安全です。9ヶ月から幼児期まで使え、どんなサイズの自転車にもとりつけられます。価格4,600円。三鷹駅南口徒歩5分。

△文通しませんか▽
将来働きたいと思っている方、又働いている方と文通したいと思っています。御手紙、心待ちしています、よろしく。

△情報交換しませんか▽

現在、自宅で特定の出版社の教材（カセット等）を使い、下請けのような形の幼稚園児と小学生対象の英語教室を開いています。同じような仕事（英語、数学、漢字教室など）をしている方、情報を交換しませんか。



△参加しませんか▽
「からだのひろば」第2期
自分のからだの変革は自分しかできない！健康の管理をしよう！ヨガ、野口整体他。
6月12日、毎火曜、夜6時半～8時半。千駄谷区民会館、もしくは神宮前区民会館にて。入会金千円、5枚綴チケット3千円。

女性のための知識講座

5月23日 最近の広告業界について

△広告関係への就職▽田中利見

6月13日 市場調査の話

△リサーチ関係への就職▽田中利見

月に2回、右記のようなテーマで就職講座を開いています。託児係付き。高田馬場駅前ビックボックス9階にて。受講料月額12,000円。

詳しくは、エラッシュエス事務局まで。

TEL 03 (710) 7547

結婚改姓に反対する会

私達の会では、現在の家庭の中に残っている古い「家」の概念、夫婦のあり方をめぐる社会通念を打破するため、又、女が今よりもっと自立して生きるために結婚しても別姓を保ち、互いに個々の姓で社会活動を続けることが出来るよう、民法の改正の請願運動をしています。署名に御協力を。

中央区銀座8の10銀座8丁目10番ビル5階

岩井法律事務所内 結婚改姓に反対する会

TEL 03 (572) 2991

スタッフだより

今月のハイライト、日下部さん、4月1日2日と「入園準備のため」保育園が休園というので、保護者会役員であった彼女は、その撤回のために3月4月と、市当局、園を相手に心身共にクタクタ果てたのでした。

園（当然のように）休園です。（親が休めばよいのでは。）

保護者 働いている人達を対象としながら一方的に休園、どうするかは知らない、では困る。

市の方針ですから、園としては何もコメントできません。

市の主任会議で決まったことです。毎年こうでした。

保護者 準備にどうしても九二日かかるのか。保育さんの子供はどうするのか。休園ならば休むか人に預けるかしかないが、夫も妻も子供の病弱などで年休はくいつぶしているのが普通だ。行政は働く者の休暇の現状に即すべきだ。地方自治体は地域の要求を無視するの。か。

どうしても休めない人の子供に限って、園の一室で保育さんの一部で保育しよう。

急に方針を変更されても対策が立てられない。園は倍すから、保護者有志で保育してほしい。

などなど、団地内公立3保育所で交渉にあたったにもかかわらず、各園の歩調が乱れたり、

市と園の逃げ腰、責任のなすりあい、なにより多くの保護者の無関心、それでいていろいろな都合に批判だけは山ほど来て、いろいろなものが改めて見えてきた次第。地域に密着した運動とは、都会の定着性のない核家族の集合の中でどう問えばいいのか、と再度考えこんでしまった彼女です。

藤元さん、預かるヒトから預けるヒトへのメドが立つてようやく再就職。保育ママさんのな所へ預けていたので保育料は四万とキツイけど、8月には公立保育園が新設されるので、きつとそこへ入れるだろうとガンバッテいるのです。

佐久間さん、4月に退院してもつか自宅療養中。結局2ヶ月の入院と数ヶ月の療養で、骨折というものは体が不自由ながら頭脳は明晰であるゆえ、さぞもどかしいことでしょう。

山岡さん、再就職を決意したもの、希望した社会福祉関係の職場へはなかなか入れず、「子持ち」と駈られる悲哀をかみしめつつ、展望を模索中です。

その他のメンバー、相も変わらず多忙ではあります。ではまた来月。（日下部）



子育てと婚姻制を考えるティーチ・イン
5月22日（日）午後1時半より
中野文化センター（中野南口7分）
主催「交流」

魔女コンサートがありますよ

今年で3回目の魔女コンサートは「舞いあがれ！女たちの熱い思い」のテーマで開かれます。5月22日（日）PM2時半～8時 場所は日比谷野外音楽堂（国鉄「有楽町」徒歩5分、丸ノ内線「霞ヶ関」徒歩3分、その他「日比谷」「銀座」からも来れます）。女がつくる女のためのコンサート、今年は会場のすみずみまでコンサートにしてしまおうと、女のうた、女と女の対話、女のアピール、コント、女の詩、パントマイム、奇術などのステージとともに、かべしんぶんや女たちの本、魔女商会出店が会場中にいっしょにくりひろげられます。子どもたちがねころんだり、おやつをたべたりするところもあります。出演は中山千夏、中山ラビ、青木ともこ、ヨネヤママコなどたくさんさんの女たち。入場料は前売千円、当日売千二百円、12才以下百円で。

前売は新宿のホーキ星やブレイガイドで売っています。詳しい問い合わせはTEL 03 (341) 1961 魔女コンサート企画までどうぞ。

編集部から

△ゴメンナサイの記▽

先月号版14の情報誌がとでも遅れたこと、ゴメンナサイ。ちよつびり、ストライキの関係や印刷屋さんの都合もあったのですけど。とにかく、特に吉祥寺周辺の方、申し訳ありませんでした。せつかく、たまに交流会が近くで開かれたのに、急なスケジュールで、出席したくてもできなかった方もいらつしやることでしよう。ホントにゴメンナサイ。もう一つ、誤植が多かったこともゴメンナサイね。△原稿募集集中▽

・夫・父・男のテーマは現在、特集中です。でも一度に情報誌に載せてやり切るのには無理なので、何回か続けてやって一つの区切りが見えるカナという感じにできたらと思っています。

・働くこと#のテーマは次回から特集をスタートさせたいと思っています。将来外で働きたいと思っている人は、「何がきっかけで働きたいと思うようになったか」「外で働くこと(稼ぐこと)と内で働くこと(家事・主婦業)をどう考えているか」「夫への伝え方・言い方・反応ぶり・意見・関係の変化はあったかどうか」「子どものこと・子育てをどうしたいのか」「自立」というものをどう考えているか」「再就職する(社会的に復帰する)ことの心(精神的、社会的)準備をどうやっているか、又は必要ないか」「具体的に再就職への準備や行動はどうやっ

ているのか」などなど、考えたこと、迷っていること、感じたことをどんどん書いてみて下さい。又、現在すでに働き始めた人も、前に記したようなことなどは是非、ふり返って書いてみて欲しいのです。

そして「働いてみて、働き始める前のそれと、どのように変わったか、変わらなかったか」「今、働いてみて感じていること」「職場での女たちのこと」「男たちの働きぶりをみてどう思うか」なども含みつつ、今のところ外で働く気のない人も、前出のようなポイントで是非、書いてみて下さい。何度も書いてみて下さいと言っていますが、これは、原稿としてまとまっても、まとまらなくてもいい、是非、考えてみる、整理してみることをおすすめしたいからです。

・「地方だより」是非、遠方の方、グループがつくれないうる方、情報誌上での活動に参加しませんか。

・「共同保育考」実践している人、実践していない人、疑問、問題提起、迷っていること、解決困難なこと、等々をいっしょに考え合っていきたい。お寄せ下さい。

・「図書コーナー」特に、フェイシートに本名を書いて下さった方々、もう少し詳しい感想と出版社名、著者名をお知らせ下さい。又、もしかすると、こちらから催足の連絡がいくかもしれません、よろしく御協力を。



お知らせ

・保育問題研究グループ

6月5日(日) PM 1時~4時半

デイン・ダン・ドン

西武線「田無」ひばりが丘よりバス

連絡先

・働くことの研究グループ

6月12日(日) PM 1時~4時半

場所は未定

テーマ# 何故、働きたいのか#

連絡先 まで

・父の日#をきっかけに考えるトークイン

6月4日(日) PM 1時~4時半

世田谷区第五出張所

小田急線「梅ヶ丘」南口3分

テーマ# 父、夫、男……人間#

男性発言者も参加の予定

連絡先 事務局まで

・マージャン大会

5月29日(日) 正午より

幾代宅(東西線「神楽坂」3分)

会費500円、景品あり、子供不可、12名位

連絡先